七つの街道

井伏鱒二

文藝春秋新社

七つの街道

昭和三十二年十一月二十日　初版
昭和三十三年一月三十一日　三版

定價　三〇〇圓

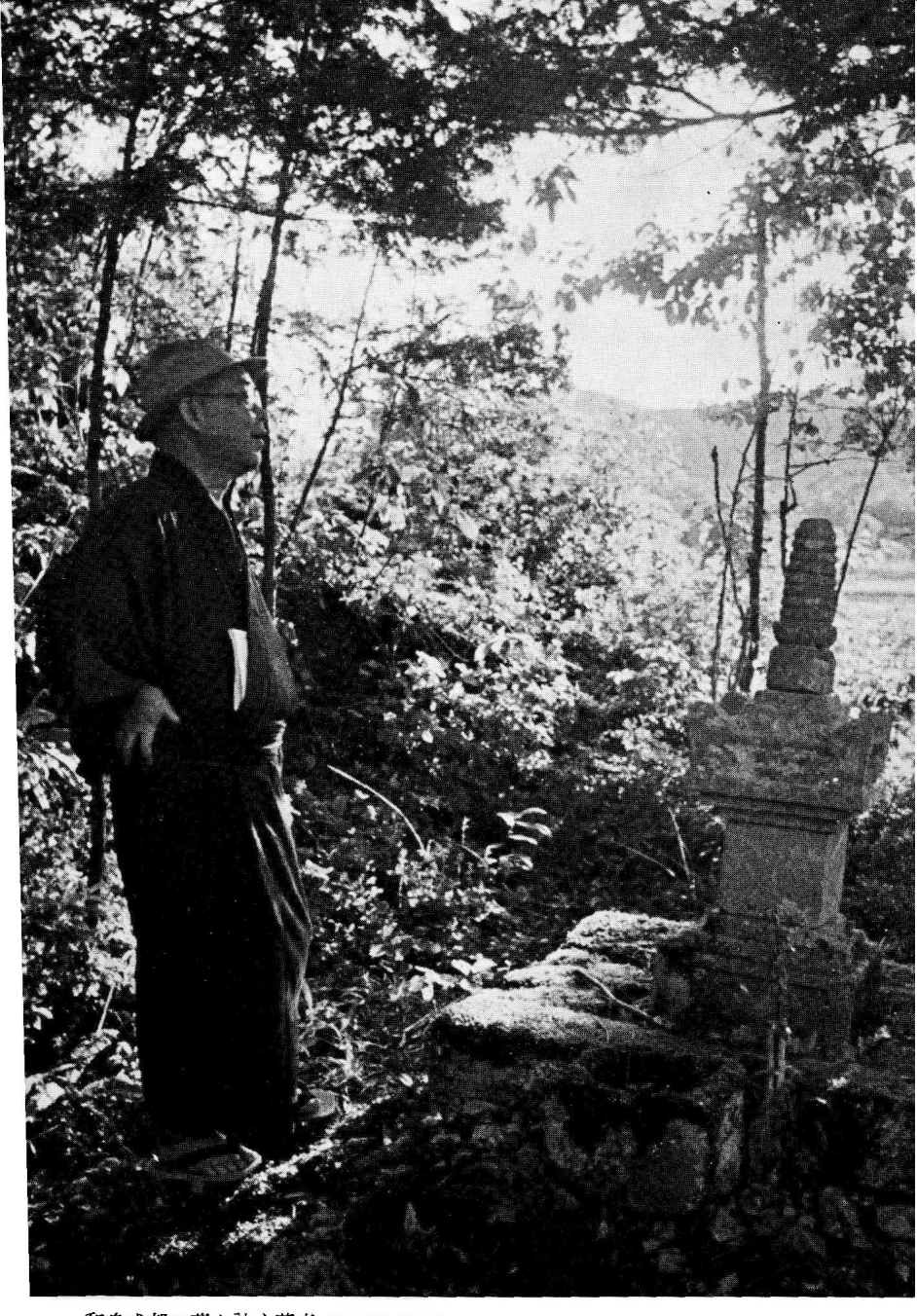
著者　井伏鱒二
發行者　車谷弘
印刷者　山田一雄

發行所　文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

本文印刷　精興社
函　大日本印刷
製本　中島製本

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店又は發行所にてお取り換え致します

© 1957 Masuji Ibuse Printed in Japan



和泉式部の墓を訪う著者（本文10頁参照）

硫黄島　菊村到

かつての激戰地に再び渡つた若者の謎の死をめぐつて、しんしんと胸打つ戰いのいたましさを描く芥川賞作品他五篇。最も新奇な小說と諸家絕讃！　二五〇圓

鴛鴦の間　舟橋聖一

官能の世界を描いて絕對の著者が流麗な筆を驅つて描く野心的長篇小說。父母の不倫を知つて家出した少女蕈子の宿命と人生の哀愁を描く傑作。　二九〇圓

忘れ殘りの記　吉川英治

貧窮の家庭に育ち、行商、丁稚奉公と世の辛酸をなめ、ついに今日の偉大な作家となるその半生は、そのまま小說でありその面白さは小說以上です。　二八〇圓

火事息子　久保田万太郎

いなせでしゃつきりした江戸ッ子職人のすたれゆく氣質を浮彫りした巨匠の最新作。吉原大火など明治大正の風俗模樣を背景にした鮒屋儀兵衛傳。　二九〇圓

麻藥3號　五味康祐

麻藥ボス、ヒロポン中毒、夜の女と惡德の渦まく神戸を舞臺にインテリヤクザの純愛を追求する現代長篇。卓拔な着想で最後まで魅きつけられる。　二四〇圓

劍客物語　子母澤寛

澁い江戸辯で齒切れよく、物情騷然たる幕末に生きる劍客の姿を描く。吉原遊女の悲戀も絡ませ、柔剛折りまぜた傑作短篇集。　二四〇圓

文藝春秋新社

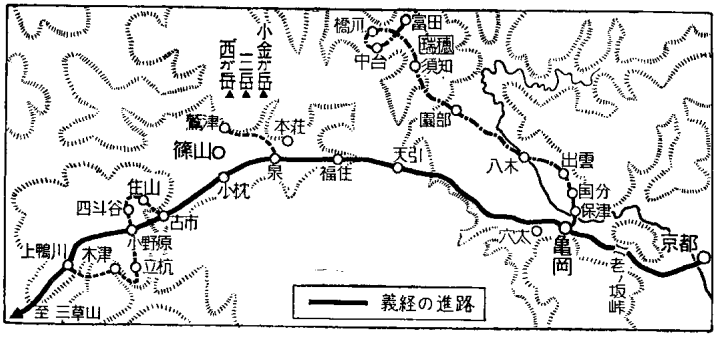
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

七つの街道　目次

ささやま街道……七
久慈街道……三五
甲斐わかひこ路……六七
備前街道……九七
天城山麓を巡る道……一二七
近江路……一五七
「奥の細道」の杖の跡……一九一
あとがき……二三七

七つの街道

ささやま街道



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二日路を一日に打たせて…

丹波路の旅といふのを縮小して、大體のところ篠山街道を一と巡りする旅にした。それも、初めのうちはどんなところに興味を置くか豫定してゐなかつたが、ふと思ひついて、その昔、一ノ谷へ駈けつけた源九郎義經の足どりの跡を巡る旅にした。同行者は文春別冊編輯部の印南君と寫眞部の原田君である。

古い軍記軍談に、京を出發した義經は「二日路を一日に打たせて」丹波路を急行軍し一ノ谷に迫つたと云つてゐる。無論、そのとき義經は篠山街道を行つたのだが、かつて私は「二日路を一日に打たせて」といふ意味は、急行軍する形容だらうと小說のなかに書いたことがある。それに對して、未知の或る人から、それは形容ではなくて實際に二日路を一日に馳せたことだ

と反駁の投書が來た。これが今だに私の記憶にある。ついては今度、丹波へ出かけるので、地元の人に判斷を願つてみたいと考へついた。

地圖を見ると、丹波の國には幾つもの盆地がある。盆地から盆地へ越えるには、高い峠を越えなくてはいけないので、いかに奥州産の名馬に乘つた義經の一隊とて、京から篠山の先の小野原まで一日で行軍できるものではないと思つてゐた。（これは現地に行つて、私の間違ひだとわかつたが）こんな片々たる疑問を、せつかく丹波路を行く旅の主題にするのは變質のやうにも思はれた。それで私は同行の印南君に、冗談ごとにしてかう云つた。

「篠山街道について言へば、この道は、大急ぎで通るのが故實に從ふことになるやうだ。源義經も篠山街道を大急ぎで通つた。足利尊氏も、西國へ落ちるとき大急ぎで通つた。明智光秀も、本能寺を襲撃するときには、老ノ坂を大急ぎで越えた筈だ。僕等も今度は丹波路を大急ぎで旅行するのだから、篠山街道を行くことにしよう。」

木に竹をついだやうなことを云つた。それでも印南君は大體のところこの案に贊成して、東京を發つ前に篠山町の文化顯彰會に連絡し、尙ほ園部町の吉田さんといふ歴史の先生にも連絡してくれた。

篠山街道といふのは、京都から老ノ坂、亀岡、福住を經て、篠山に至る往還である。園部町はこの街道から可成り反れたところにあるが、印南君は篠山への直行を避けて園部に寄ること

を主張した。文獻によると義經は、京から一ノ谷に向つて進擊するに先だつて股肱の臣に命じ、園部の手前、八木の邊の衆徒を語らつて配下に入れさせたさうである。それで私も園部に寄る案に贊成し、京都から先づ園部に直行してその町の三龜といふ宿屋に着いた。

この町は、江戸初期に低地を埋めて（川筋を變へて）つくつた町だから、今でも井戸を少し深く掘りさげると、朽ちた木が横になつてゐるのにぶつかることがあるさうだ。

宿屋の庭の石燈籠に、青苔が厚く盛りあがつてゐるのが見事であつた。

「でつかい苔だ、まるで京都の東山のやうな恰好だ。」

と私が驚くと、この町は霧が深いから幾らでも苔が生えると女中が云つた。何といふ名前の苔かと訊ねると、そんなことはわからないと云つた。スギ苔にも似てゐるしビロウド苔にも似てゐる苔である。

私は宿屋の裏門から川に出て釣をしてみたが、まるで手應へがなかつたので、釣具屋に寄つて新しい餌を仕入れた。

「この町の名物には、どんなものがありますか。」

釣具屋の主人に訊ねると、ここには名物なんていふものはないと答へ、見物するほどのところも何一つないと云つた。

宿に歸ると印南君に促され、吉田さんといふ歴史の先生を訪ねて城址に案内してもらつた。

園部城址である。この城は、元和五年に但馬の出石から移封された小出吉親といふ殿様の構築で、總廓の廻り二十一町餘であつたといふ。ここの城下町の規模に比較して城廓が廣大にすぎるやうに思はれるが、いま殘つてゐる城の建物は、現在の城下町に對して、ちやうど似合ひのやうな感じである。わづかに城門が一つと、隅櫓が一つと、塀の一部が、一箇所にまとまつて殘つてゐる。ほかには濠の一部が殘つてゐる。しかし中世的な城門と櫓だから、よく昔の戰爭を取扱ふ映畫の背景に使はれるさうだ。

「京都から來たロケ隊は、織田信長が馬に乘つて出陣するのを寫すときにも、あの城門と櫓を背景に使ひました。映畫の主役が鎧を着て馬に乘るときには、殆どみんな替玉なんですね。」

吉田さんがさう云つた。

翌日、朝早く吉田さんの案内で宿を出たが、篠山へは夕方までに着く方が都合がよかつたので、道草をくふことにして反對の方角にある和泉式部の墓を見に行つた。云ひ傳へによると、和泉式部が丹後の國へ赴いたとき、家に殘つてゐたその娘の小式部が「大江山、生野の道の遠ければ、云々。」といふ歌をうたつたといふ。しかも生野といふところは丹後にある。和泉式部も丹後への行き歸りには丹波路を通つたわけだらう。

私たちは福知山街道を北に向けて行つた。途中、觀音峠といつて、日本海と瀬戸内海にそそぐ水の分水嶺になつてゐる峠を越えた。暫く行くと、須知町といふ長つ細い町があつた。この

土地でも、やはりこんな町はフンドシ町と云ふさうだ。この町を通りすぎて枝道を左に折れ、瑞穗といふところの岡の麓のお寺に行つた。西岸寺といつて、本堂に式臺の玄關がある甚だ古びた寺である。白い犬が私たちに向つて吠えついた。その聲で、横手の土間口から梵妻らしい上品な婦人が現れて、

「いま、住職さんは來客で手が放せない。しかし、和泉式部のことを書いた古い書類がある。それをお目にかけたい。」

さういふ意味のことを、遠慮ぶかい樣子で云つて、奥から古新聞にくるんだ寫本を持つて來て見せた。文化二年に書いた書類である。私はその一部をノートに拾ひ書きした。

「式部、尼となり、云々。身は墨染の衣をまとひ、手には百八の念珠を持し、しきみの花、云々。西刹に向ひ端座合掌をなし、念佛數遍高聲なして、云々。人皇六十六代、一條院御宇、正暦四癸巳の年、三月二十一日正午の時に、大往生の本意をぞ遂げにける、文化二年まで約八百二十三才、云々。」

急いで筆記したので書き誤りがあるかもしれないが、式部の大往生を遂げたといふ正暦四年（癸巳）は西暦九九三年である。しかし岩波書店の小辭典「日本文學」古典篇によると、和泉式部の生歿年月は不明となつてゐる。河出書房の「日本國民文學全集」の年譜には、式部の歿した推定年月は長元九年（一〇三六年）となつてゐる。

その年月は、いづれが正しいか知らないが、「正暦四癸巳の年、三月二十一日正午の時」といふ方が、日時を詳しく書いてあるといふ點においては優れてゐる。しかも私がその文章を筆記してゐる間ぢゆう、障子の内側に碁を打つ石の音がして、いかにものんびりした氣配であつた。自分の筆記した文章の内容を、このときだけでも信じなくては損ではないかといふやうな氣持がした。

いはゆる和泉式部の墓は、境内を出てすぐ左手の棚田のわきの木立のなかにあつた。臺石が苔むしてゐる。五輪の塔である。たぶん文化二年の頃にでも誰か供養の意味で建てたのだらう。式部のやうに、自由自在に和歌をつくれるやうになりたいと念願して建てたのだらうか。または、式部の經驗したやうに、身分高い人を相手に奔放な戀を成就させたいつもりのことであつたらうか。私はその石塔を拜みたいとは思はなかつたが、寫眞の原田君が「そのお墓の前に、ちよつとしやがんでみてくれませんか。」と云ふので、その通りにした。

歸りに氣がついたが、寺の境内にのぼる坂の下に、郵便屋の乘るやうな車體を赤く塗つた自轉車が立ててあつた。住職と碁を打つてゐた客の自轉車だらう。泥よけに、「瑞穗町三〇九」と白ペンキで記されてゐた。

細い道から往還に出て暫く行くと、

「この邊に、車塚がある筈です。寫眞で見ると、可愛らしい古墳です。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com